

七点

②満ち潮の運河夕焼けを運びをり

柏尾のり子

春先から、九州から横浜への引越しと、思いがけない母の入院、手術、リハビリが重なって、七月末、九州に看護に帰っている時、体調をくずしてしまいました。一週間入院した病院は、眼下に北九州工業地帯が広がって、工場と海をつなぐ運河が見えていました。水面に映る夕陽が、夕方の満ち潮にのってゆっくりと逆流する様子を毎日見ながら作った句です。

①洗濯機回すをとこの晩夏かな

佐渡谷秀一

夏の暑い日、外出から戻ると汗かきのせいで、内から外まで、びしょびしょになる。たいしたものを着ているわけではないので、独り住まいの私は、全部自分で洗うことにしている。そのような日々が続き、洗濯の手順も面倒と思わず手馴れたものになる。然し、連日、自分の衣類だけに係わっているのも怪しいものである。

血管の青き迷走日焼の手

松浦かほる

相鉄線の二俣川駅は工事中です。その中には、年配の方も沢山働いています。その方々の手は日焼けして黒いのですが、血管は浮きあがっています。複雑に走る青い血管に、働く苦労と逞しさが、又、人生までも感じてしまいます。時々、自分の「迷走」をじっと見つめます。

六点

バス停の小さき片蔭ゆづり合ふ

辻 幸子

私の家の近くのバス停は狭い道路に面していて屋根も椅子もありません。後ろは小さな駐車場でその脇に農協の販売所がありますが、小さな建物なのでその日陰も狭いものです。よく晴れた日には日傘をさした女性が日傘をささない男性にその場をゆずります。暑い季節によく見かける光景です。

五点

①踏みそうで踏めない夏至のわが影よ

恩田 才美

幼き日の遊びから始まる影踏み。影はその時々私の等身大のありのままの姿として確とあつた。今年の夏至の真昼、私の影は全く思いもよらぬ小さな存在として地に写し出された。自然の現象ではあるが、未知の私があるに写し出されたのである。

①喝采の紙切り芸や夏木陰

藤本 友子

上野の美術館へ行った帰りの、広場での大道芸を詠みました。中でもひとときわ喝采を浴びていたのが、白かすりの和服の娘さんが紙切り芸をしている木陰でした。お客さんにモデルになってもらい、その人の横顔を切り抜くのですが、驚くほど特徴をとらえて、よく似ているのです。そして、その作品をファイルに入れてプレゼントし、モデルは、お札のコインを缶に入れてました。モデルになりたい人が列をなしており、外人さん達も大喜びの光景でした。

①海よりの風の緩やか青蜜柑

増田 守

本句は伝統的俳句の系譜にある。神奈川県内に生まれ育った者にとつて、伊豆半島は、遠足や小旅行の目的地によく選ばれる。目の前には、今、青蜜柑が鈴なり。緩やかな風が寄せている。これからは実を吹き落とす台風などの来襲もある。一個も欠けることなく、黄色く色づいた蜜柑に成長して欲しいものだ。

四点

②縄文の遺跡のなかへ蟻の列

坂本 則敏

尖石遺跡のまわりには、山アリ（黒アリ）と赤アリがいますが、山蟻がいると赤蟻は逃げます。縄文の頃より山蟻が八ヶ岳の周りを守っています。古より山守神のような、尊ささえも感じられます。

①朝顔や記憶のつるべ虚空へと

坂本 則敏

朝顔は虚空へとそのつるべを伸ばします。DNAによるものでしょうが、子供の頃より不思議でなりません。生命の尊さを感じます。